

降誕前第8主日礼拝説教 「あなたも証人です」

日本基督教団石神井教会 2016年10月30日

【旧約聖書日課】イザヤ書 44章6～17節

- 6 イスラエルの王である主、イスラエルを贖う万軍の主は、こう言われる。
わたしは初めてあり、終わりである。わたしをおいて神はない。
- 7 だれか、わたしに並ぶ者がいるなら、声をあげ、発言し、わたしと競ってみよ。
わたしがとこしえの民としるしを定めた日から、
来るべきことにいたるまでを告げてみよ。
- 8 恐れるな、おびえるな。既にわたしはあなたに聞かせ、告げてきたではないか。
あなたたちはわたしの証人ではないか。
わたしをおいて神があらうか、岩があらうか。わたしはそれを知らない。
- 9 偶像を形づくる者は皆、無力で、彼らが慕うものも役に立たない。
彼ら自身が証人だ。見ることも、知ることもなく、恥を受ける。
- 10 無力な神を造り、役に立たない偶像を鑄る者はすべて
- 11 その仲間と共に恥を受ける。
職人も皆、人間にすぎず、皆集まって立ち、恐れ、恥を受ける。
- 12 鉄工は金槌と炭火を使って仕事をする。
槌でたたいて形を造り、強い腕を振るって働くが
飢えれば力も減り、水を飲まなければ疲れる。
- 13 木工は寸法を計り、石筆で図を描き、のみで削り、コンパスで図を描き
人の形に似せ、人間の美しさに似せて作り、神殿に置く。
- 14 彼は林の中で力を尽くし、樅を切り、柏や檜の木を選び
また、樅の木を植え、雨が育てるのを待つ。
- 15 木は薪になるもの。
人はその一部を取って体を温め、一部を燃やしてパンを焼き
その木で神を造ってそれにひれ伏し、木像に仕立ててそれを拝むのか。
- 16 また、木材の半分を燃やして火にし、肉を食べようとしてその半分の上であぶり
食べ飽きて身が温まると、「ああ、温かい、炎が見える」などと言う。
- 17 残りの木で神を、自分のための偶像を造り
ひれ伏して拝み、祈って言う。「お救いください、あなたはわたしの神」と。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 3章21～28節

²¹ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。²²すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。²³人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、²⁴ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。²⁵神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。²⁶このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。²⁷では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。²⁸なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。

すべての人の神だから

先主日の午後、わたしたちの教会では、教会員の皆さんにお集まりいただいて教会の課題を共有し話し合う「全体懇談会」を開きました。4月に着任したわたしどもからお願いして、今年は何度も「全体懇談会」を開いて皆さんと意見交換をさせていただいているわけですが、今年3回目の「全体懇談会」ということからでしょうか、あるいは、前の週に「在天会員記念礼拝」があつて続いての日曜日だったからでしょうか、出席された方は少なかったようです。けれども、出席してくださった皆さんは、大変活発に意見交換をしてくださり、わたしが終了時刻と考えていたよりも1時間も余計に、皆さんとの貴重な時間を過ごさせていただくことになりました。

意見交換が少しヒートアップして、後に尾を引きずられた方もあったかもしれませんが、わたしは、皆さんがお互いの考えていることを率直にお語りくださったことをよかったと思っています。いろいろな考えの方がいらっしゃることが、よく分かったからです。その違いを超えて、異なる考えを持ったままで、それでも皆さんが、なお一つの教会に集められ、教会として一つになろうとする営みに加えられているのです。

皆さんは、もちろん、そこで自己中心的な考えで、自分が教会で主導権を握りたいと思つてご自分の意見を主張されるわけではないでしょう。わたしたちは、信仰によって、何よりも平安を得たいのであって、権力や名誉を得たいわけではありません。できれば、些細なことであっても争いたくないし、感情的になるようなことも避けたいのです。意見が対立したり、考えがなかなか一致しないということで、お互いに気まずい思いをするのも、好まないでしょう。意見がいろいろと出てくるような議論は、初めからしなればよい、と考えることだってできる。あるいは、議論になるようなことは実行しない、ということにしてしまうことだってできる。けれども、それは、お互いの間にある考えの不一致や意見の違いを、ただ隠しておいているだけのことです。

本当は、議論をしなくたって、何も特別なことを実行しなくたって、わたしたちは、お互いに異なる考えを持ち、違った物事のとらえ方をしているのです。そうであれば、それを表に出してみたほうがよいのではないのでしょうか。実際に実行してみたほうがよいのではないのでしょうか。最初は、意見が対立して関係がギクシャクすることもあるかもしれない。「もう一緒にやっつけられない」と思い詰めることもあるかもしれない。最悪の場合、分裂としか言いようのない状態に陥るかもしれない。そうだとしても、わたしは、そこに歩みを進めてみたほうがよいと思います。なぜなら、わたしたちは、神の教会に招かれている者たちだからです。神は、決して、わたしたちを分裂したままにはなさない。むしろ、必ず一致へと導いてくださる。神の御前に一つにしてください。神はお一人だからです。神は、すべての人の神だからです。神は、わたしたちの誰一人も分け隔てなさることはないからです。神は、わたしたちのゆえにではなく、ご自身のゆえに、御子のゆえに、わたしたち皆を、必ず一つにしてくださいのお方だからです。

神を証しする教会

今から499年前の1517年10月31日。ドイツのヴィッテンベルクという町で、一人の聖書学者が神学論争を始めました。その町の城に隣接する教会の扉に、95項目にわたる神学問題を記した文書を貼りだしたのです。その人物は、皆さんご存知の、カトリックの修道司祭であったM・ルターです。

明日は、そのことを記念する「宗教改革記念日」です。その「宗教改革記念日」を憶えて、特別な礼拝を整えてきたのは、ルターの手による改革で生まれたルター派教会だけではないようです。多くのプロテスタント教会が、その当日、あるいは直前の日曜日に、「宗教改革記念日」の礼拝を行ってきたのです。来年は、いよいよルターの改革開始から500年の記念の年です。その「宗教改革記念日」の記念礼拝を、来年の当日、ルター派教会の人たちとローマ・カトリック教会の人たちは、一緒に行う準備を、すでに昨年からは始めているのだそうです。そのことを全世界で進めていくために両教派で共同で公にされた書物があります。そのタイトルは『争いから交わりへ』。

記録によると、99年前、ルターの宗教改革開始から400年を記念する年には、ルターを英雄視するプロテスタント諸教会と、ルターを異端視するカトリック教会は、互いに激しく非難し合うということが起こったのです。それから1世紀。50年前に、まずローマ・カトリック教会がほとんど180度の方向転換をするような大改革を始めたことから、ルター派教会だけではありません、それまで互いに異端視し、破門し合っていた諸教派教会との間で、争いをやめ、一致を目指した交わりを進めることが始まったのです。

もちろん、いまだ多くの違いが、互いの間に横たわっているのです。450年も分裂し、離れて歩いてきたのです。プロテスタントの側の問題を言えば、その間に、さらに教会が分裂し、分かれていくということを繰り返してきました。そのような教会が再び一つになるには、互いに離れて歩んできただけの時間がかかるのかもしれませんが、それは、容易なことではないでしょう。

事実、そのような困難な道を歩むことを拒んだり、避けようとする動きは、カトリック教会にも、プロテスタント諸教派の中にも、あるのです。「もう、それぞれ別々にやってきたのだから、今後もお互いに関わり合わないでいいではないか」というのです。あるいは、「もう、こんなに長い間、違う考えでやってきたのだし、それぞれ自分が正しいと思ってやってきたのだから、今さら引けない」というのが本音の人たちもあるでしょう。

けれども、今起こっている、諸教会が再び一致しようという動きは、引き返せないことだと思います。教会は、その存在からして、一致を目標としているからです。教会の主である神は、お一人だからです。わたしたちの間で分裂があることをお望みではないからです。わたしたちを教会にお招きくださった神は、わたしたちが一つになる姿を通して、ご自身のご栄光を現されるお方だからです。

「あなたたちはわたしの証人ではないか」と預言者イザヤを通して神がイスラエルにお告げになられた御言葉は、わたしたち教会にも向けられた言葉なのです。

《義》とされる道を示して

M・ルターは、決して教会を分裂させ、自分が指導者となる新しい教会を分離独立させようと考えのではありませんでした。むしろ、当時の教会の現状を見て、そこかしこ至るところに、大小の分裂や対立があることに心痛め、教会が真の神を神として一つになることを願って、問題提起をし、改革に着手したのです。

ですから、そのルターがヴィッテンベルクの城教会に掲げた 95 箇条の論題の第一を、わたしたちも、心に留めたいのです。

《一 私たちの主であり師であるイエス・キリストが、「悔い改めなさい」と言われたとき、彼は信じる者の全生涯が悔い改めであることをお望みになったのである。》（『ルター著作選集』より）

わたしたちの悔い改めるべきことは、何よりも、偶像礼拝の問題でしょう。それは、イザヤの預言で皮肉を込めて描かれているような、金属や木で造られた像を拝むことではありません。イザヤの預言も、そのような人の手で造られた像を有り難がることを問題にしているわけではないのです。むしろ問題なのは、わたしたちが「自分自身を神とする」ことです。「自己偶像化」です。聖書全体が、そのような意味での偶像礼拝を問題にしていると言ってもよい。創世記3章の「蛇の誘惑」物語で、蛇が誘惑したのは「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる」（創 3:5）ということでした。「神のようになること」を願う。それが、聖書で問われるわたしたちの偶像礼拝の問題、罪の問題なのです。

わたしたちは、自分自身を神としようとするとき、真の神を必要としないのです。むしろ、神が「自分に都合のよい神」であることを願って、そのような神のことを立てておくことさえする。けれども、そこに、わたしたちの救いはありません。わたしたちは、自分が神になろうとしても、あるいは仮に神のような力を得たとしても、本当には自分を救うことはできないでしょう。わたしたちは、どんなに立派になろうとも、決して《神の器》ではないのです。

《土の器》であるわたしたちには、それにふさわしい生かされ方があるのです。神に造られたものとして、神に用いられる《器》として、生かしていただくのです。そのようにわたしたちを生かしてくださる神のことを信頼し、神がそうしてくださるといふこと、つまり《神の義》に信頼するのです。いいえ、神が聖書の御言葉をもって、今お語りくださっていることに耳を傾けるならば、わたしたちは、お語りくださる方との間で信頼関係を結ばないではいられないのです。

主イエス・キリストが、わたしたちに、その《神の義》をお示しくださったと、使徒パウロは力強く繰り返し証ししてくれています。教会は、そのパウロの証しに「アーメン」と応えて、後に続いてきました。ルターもまた、このパウロの証しした福音の真理に力強く励まされ、突き動かされて、行動を起こしたのです。

それは、分裂のための行動ではありませんでした。一致を願い求める行動でした。その願いの実現を、神が御業のうちに明らかにしてくださるのを、ルターは自分の目で見ることがありませんでしたが、しかし、今、わたしたちは、その実現を目の当たりにし始めているのです。だから、わたしたちも、始めるのです。